

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520277

研究課題名(和文)ロマン主義時代における国民小説の誕生とその変容

研究課題名(英文)The Birth and the Transformation of the National Tale in the Romantic Age

研究代表者

鈴木 美津子(Suzuki, Mitsuko)

東北大学・国際文化研究科・名誉教授

研究者番号：60073318

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ロマン主義時代に成立した国民小説(National Tale)は、植民地支配下にある小国を舞台にし、過去の民族の歴史や文化的栄光を称え、現在の政治的苦境を宗主国であるイングランドの読者に訴えることを主眼とするきわめて政治性の強い小説ジャンルである。

本研究の目的は、マライア・エッジワース、シドニー・オーエンソンなどのアイルランド出身の女性作家によって構築された国民小説が、ヴィクトリア朝時代に引き継がれていく過程でいかなる修正、変容を加えられたのかを、小説に用いられている枠組み、テーマ、道具立てを分析し、作家の宗教意識、政治意識などを浮き彫りにすることによって検証した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present research project is to illustrate how much Irish and Scottish novelists, such as Sydney Owenson, Maria Edgeworth and Sir Walter Scott contributed to the birth and the development of national tales in the Romantic period. National tales depict a colonizing subject traveling through a colonial space, like Ireland, Scotland, and India and falling in love with a colonized subject; the colonized heroine/hero married the colonized hero/heroine, bringing about the conciliatory marriage between colonized and colonizer. Novelists in the Romantic period draw on the conventional use of the journey of discovery plot as a vehicle for expressing their political, and religious opinion. I showed that their national tales provided novelists in the Victorian age with themes, plots, and underlying structures for their novels. I also elucidated that the national tales in the Romantic age exerted a great influence over Charlotte Bronte, Benjamin Disraeli, and Elizabeth Gaskell.

研究分野：英米文学

 キーワード：国民小説 歴史小説 シドニー・オーエンソン マライア・エッジワース サー・ウォルター・スコット
 植民地主義 帝国主義 アイルランド

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初の状況は以下のとおりである。ロマン主義時代の小説を扱った Gary Kelly、Ina Ferris、Joseph W. Lew、Ian Dennis、Thomas Tracy、Robert Tracy などの論考において、Sydney Owenson や Maria Edgeworth そして Charles Robert Maturin などの国民小説 (National Tale) が時に言及されることはあったが、指摘は部分的であり、かつ十分に議論されているとは言い難かった。また、Mary Jean Corbett の *Allegories of Union in Irish and English Writing, 1790-1870* (2000) は、Owenson と Edgeworth の作品を取り上げ、結末における結婚の象徴的意味を帝国主義的言説の中で探った秀逸な論考であるが、国民小説成立に関する議論は不十分であった。Katie Trumpener の大作 *Bardic Nationalism* (1997) においては、国民小説成立の事情を広範な資料を基にして考察していて、示唆的ではあるが、議論が散発的で不満が残った。Terry Eagleton の大著 *Heathcliff and the Great Hunger* (1995) には、きわめて刺激的な Edgeworth 論と Owenson 論が収録されており、本研究にとって重要な文献の一つであるが、ロマン主義時代の国民小説を包括的に論じてはいない。また、国民小説の系譜をヴィクトリア朝時代の小説にまで探る試みは、国内、国外を問わず、なされていないように思われた。

(2) 『ルソーを読む英国作家たち』(国書刊行会、2002) において、ロマン主義時代の女性作家の作品を論じた際に国民小説の成立に関心を抱いたのが、本研究の萌芽と言える。ここ数年、本研究課題の準備段階として以下の研究発表をおこなった。「Sydney Owenson はいかにアイルランドを表象するか」(日本英文学会第76回大会シンポジウム、2004年5月22日)、「異文化体験の旅 Sydney Owenson の構築した国民小説、地域小説の枠組み」(日本ジョンソン協会第39回大会シンポジウム、2006年5月22日)、「イングランドの読者と国民小説の誕生」(イギリス・ロマン派学会第32回大会シンポジウム、2006年9月23日)、「シャーロット・ブロンテとロマン主義時代の歴史小説・国民小説」(日本ブロンテ協会2010年大会招待講演、2010年10月16日)。

論文にかんしては、本課題研究に応募した時点で、4篇発表していた。「アイルランドの併合を巡る言説 チャールズ・マチューリンの『アイルランドの族長』の場合」(『英国小説研究』第23冊、英潮社フェニックス、2008年)においては、トーリー党支持者の Maturin が、自己の政治意識に合致した国民小説の構築を模索する様を検証した。『嵐が丘』とシドニー・オーエンソン」(『英語・英米文学のフォームとエッセンス』大阪教育図書、2009年)においては、Mr. Lockwood にまつわるエピソードが、国民小説・歴史小

説の枠組みのパロディであることを論じた。

「女性虐待 監禁、凍死、餓死、抑圧的な女子教育」(『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』、溪水社、2010年)、「『北と南』とロマン主義時代の歴史小説」(『エリザベス・ギヤスケルとイギリス文学の伝統』、大阪教育図書、2010年)においては、Elizabeth Gaskell の 'Morton Hall' と *North and South* を取り上げ、ユニテアリアンとしての Gaskell が歴史小説・国民小説の枠組みを用いて、英国国教会批判を展開したことを跡付けた。

2. 研究の目的

(1) ロマン主義時代に、誕生、成立した国民小説は、植民地支配下にある小国を舞台にし、過去の民族の歴史や文化的栄光を称え、現在の政治的苦境を宗主国であるイングランドの読者に訴えることを主眼とするきわめて政治性の強い小説ジャンルである。本研究の目的は、Edgeworth、Owenson などのアイルランド出身の女性作家によって構築された国民小説が、ヴィクトリア朝時代に引き継がれていく過程でいかなる修正、変容を加えられたのかを、小説に用いられている枠組み、テーマ、道具立て、そして作家の宗教意識、政治意識などを分析することによって検証し、錯綜する19世紀小説にある種の見取り図を提示することである。

(2) 1800年の「連合法」の成立後、イギリス国内ではイギリスとアイルランドの連合・併合をめぐる様々な議論が巻き起こっていた。連合法を巡る議論は、当時、政治論文、雑誌記事など様々な媒体を通じてなされたが、その中でもとりわけ注目に値するのが、おもにアイルランドとスコットランドの女性作家によって刊行された国民小説という小説ジャンルであった。本研究では、国民小説を当時のアイルランド旅行記、政治論文、論評など多様な言説を援用しながら、仔細に分析することによって、政治的、文化的、地理的に、周縁に位置するアイルランドとスコットランド出身の作家の政治意識、宗教意識、民族意識を探った。そして、作家の信奉する政治的・宗教的信条により、国民小説にいかなる変容が加えられていったのかを考察した。より具体的に言えば、従来等閑視され、作品の分析がほとんどなされていなかったロマン主義時代の女性作家の国民小説を、ときに Maturin、Sir Walter Scott、Patrick Brontë などの同時代の男性作家の作品と比較検討しながら、国民小説という新たな小説ジャンル構築に女性作家が多なる貢献をしたことを跡付け、さらには Charlotte Brontë、Gaskell などのヴィクトリア朝時代の作家にいかん国民小説が継承されたかを検証した。

(3) 本研究の主眼の一つは、国民小説を刊行した作家の政治意識、宗教意識の解明であ

った。作家の政治信条に従って、国民小説の定型に変容が加えられていったと推測されるからである。アングロ・アイリッシュの Edgeworth は、国民小説の嚆矢とされる *Castle Rackrent* (1800) を始めとして、*Ennui* (1809)、*Absentee* (1812)、*Ormond* (1817) など 4 作の国民小説を発表している。彼女の政治意識にかんしては、本課題研究の応募時点では、ある程度分析を終えてはいたが、まだ不十分な点もあり、さらに深化させる必要があった。また、*The Wild Irish Girl* (1806)、*O'Donnell* (1814)、*Florence Macarthy* (1818)、*The O'Briens and the O'Flahertys* (1827) などの刊行により、国民小説の定型を完成させたと言える Owenson にかんしては、これまですでに数編の論考を発表している。そこで、Edgeworth と Owenson 両者の政治意識、宗教意識の分析をさらに発展させることを試みた。一方、Johnstone、Porter 姉妹、Appleton、Banim 兄弟などの作品に潜む政治意識、民族意識にかんしては、ほとんど手を付けていなかった。そこで、Edgeworth や Owenson などの国民小説を解明して得た知見を応用・援用して、Porter 姉妹、Johnstone、Appleton、Banim 兄弟などの国民小説の分析、政治意識の考察を進めることにした。そして、Gaskell や Charlotte Brontë を始めとするヴィクトリア朝時代の作家に、国民小説の枠組み、プロット、テーマ、道具立て、手法などがいかに継承され、変容されたのかを検証し、その過程で作家の政治意識、宗教意識を浮き彫りにした。

3. 研究の方法

(1) ロマン主義時代の国民小説は、現在ほとんど絶版になっており、入手不可能であった。そこで、平成 23 年度、平成 24 年度は、大英図書館、ケンブリッジ大学図書館、オクスフォード大学図書館等から、マイクロ・フィルムや可能であればフォート・コピーの形で取り寄せ、現像、製本し、精読した。平成 25 年度は、資料の分析、整理にあたり、最終年度の平成 26 年には、平成 23 年度、24 年度、25 年度に得た成果をもとにして、ロマン主義時代に刊行された国民小説がヴィクトリア朝時代においていかなる変容を遂げたのか、国民小説の発展、変容に作家の政治意識がいかに関わったのか、そのプロセスを明確化し、最終的には 19 世紀の錯綜した小説群に、ある種の見取り図を提示することを試みた。

(2) ロマン主義時代に刊行された国民小説関連の文献を精読した。19 世紀初頭に多数出版された国民小説のうち、Edgeworth の作品はピカリング社刊行の全集により、また Owenson の作品のごく一部は、オックスフォード版、ブロードビュー版などにより読めるようになった。しかしながら、それ以外の作品は、現在刊行されていない。そこで本研究に密接に係わると思われる以下の作品を大英図書館、ケンブリッジ大学図書館、オッ

クスフォード大学図書館等からマイクロ・フィルム及び可能であればフォート・コピーの形で取り寄せることにした。

Sydney Owenson, *The Novice of St. Dominick* (1805); Catherine Cuthbertson, *Santo Sebastian* (1806); Anna Porter, *The Hungarian Brothers* (1807); Theodore Melville, *The Irish Chieftain and His Family* (1809); Christian Johnstone, *Clan-Albin: A National Tale* (1815); Charles Robert Maturin, *Woman; or, Pour et Contre* (1818); Patrick Brontë, *The Maid of Killarney* (1818); John and Michael Banim, *Tales by the O'Hara Family* (1825); John Banim, *The Boyne Water* (1826); Michael Banim, *The Croppy* (1828)

(3) 取り寄せたマイクロ・フィルムやフォート・コピーを、現像し、製本し、読みやすい形にした。

(4) 製本した作品を精読し、分析結果をカードに取り、また必用に応じてコンピュータにデータを入力した。

(5) 国民小説に潜む政治性を炙り出すために、同時代に刊行された政治論文、アイルランド旅行記、書評などを多数入手し、精読し、分析した。

(6) 英国に資料収集に出向き、文献のさらなる充実を図った。

(7) 最終年度の平成 26 年度は、平成 23 年度、24 年度、25 年度に得た成果をもとにして、ロマン主義時代に刊行された国民小説が、ヴィクトリア朝時代においていかなる変容を遂げたのかを検証した。

(8) 以上の成果を、片平会五十周年記念大会、日本プロンテ協会、日本オースティン協会、日本英文学会、東北ロマン主義時代文学・文化研究会などで発表し、その後論文にまとめて公表した。

4. 研究成果

(1) 第一に、ロマン主義時代に刊行された国民小説の形式的な特色を明確にした。次いで、国民小説の発展、変容に作家の政治意識がいかに関わったのか、そのプロセスを跡付けた。さらには、ロマン主義時代に構築された国民小説が、ヴィクトリア朝時代においていかなる変容を遂げたのかを考察した。得た知見の一端は、以下 6 篇の論文にまとめた。

『『縁故』に見られるマライア・エッジワースの国家観 都会、田舎、そして教育』(2014)では、Edgeworth の国民小説 *Patronage* (1814) を取り上げ、この作品を田舎、都会、子供を切り口にして、アングロ・アイリッシュで保守主義者の Edgeworth の国家観を論じた。Edgeworth が望ましいとする国家は連合

王国よりもより大きな枠組みをもった北ヨーロッパのプロテスタント国家の集合体であることを跡付けた。「スコットの『外科医の娘』に描かれた危険な他者としてのインド亜大陸」(2013)では、Scottの*The Surgeon's Daughter* (1827)を取り上げ、植民地主義、帝国主義などを鍵語として読み直しを試みた。この作品には保守主義者 Scottのネイボブに対する漠たる不安が反映されていること、帝国主義的進出に多義的であることを明らかにした。「イギリスの状況小説としての『エマ』 偽善と欺瞞、スパイ行為と裏切り」(2012)においては、摂政時代を活写した*Emma* (1815)を取り上げ、Jane Austenがいかなる国家を望ましいものと考えていたのかを、摂政皇太子を思わせる Frank Churchill、Jane Fairfaxに焦点をあてて考察した。「シャーロット・ブロンテとロマン主義時代の歴史小説・国民小説 『ヴィレット』に見られる枠組みの変容」(2011)においては、*Villette*には、カトリックの侵略に脅かされている19世紀中葉のイギリスの姿が象徴的に描かれていることを指摘し、トーリー党支持者で英国国教会の牧師の娘である Charlotte Brontëが、国民小説・歴史小説の枠組みを用いて、イギリスと英国国教会の擁護を行ったということ跡付けた。「パトリック・ブロンテの『キラニーの乙女』と国民小説の伝統」(2015)では、*The Maid of Killarney*を取り上げ、英国国教会の牧師である Patrick Brontëにとって、カトリック教徒からなる多数派のゲール系アイルランド人を政治的に排除し、少数派のアングロ・アイリッシュが率いるアイルランドとイギリスの連合国家こそが望ましい国家像であることを跡付けた。「『ラドロウの奥様』と歴史小説の伝統」(2015)においては、Gaskellの*My Lady Ludlow*を取り上げ、Gaskellがユニテリアンとしての立場から、階級的寛容、宗教的寛容、純正よりは混交・雑種こそが、これからのイギリス社会の望ましき姿であるということを訴えようとしたと指摘した。

(2) 今後の展望としては、以下のとおりである。本研究課題の遂行の過程で、Scottの*The Surgeon's Daughter* や Owensonの*The Missionary* など、小説の舞台がインド亜大陸におかれている国民小説を取り上げ、考察した。その際に得た知見を活かして、Elizabeth Hamilton や Phebbe Gibbes などのインドを舞台にした小説を取り上げ、作品に見られるインド表象を手がかりにして、ロマン主義時代に盛んにおこなわれたインドを巡る議論に、国民小説が果たした役割を明確化したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

鈴木美津子、「『縁故』に見られるマライア・エッジワースの国家観 都会、田舎、そして教育」、『東北ロマン主義研究』創刊号、2014年、53-66、査読有

鈴木美津子、「スコットの『外科医の娘』に描かれた危険な他者としてのインド亜大陸」、『試論』第48集、2013年、43-57、査読有

鈴木美津子、「イギリスの状況小説としての『エマ』 偽善と欺瞞、スパイ行為と裏切り」、『英国小説研究』第24冊、2012年、5-31、査読無

鈴木美津子、「シャーロット・ブロンテとロマン主義時代の歴史小説・国民小説 『ヴィレット』に見られる枠組みの変容」、『ブロンテ・スタディーズ』第5巻第3号、2011年、29-51、査読有

[学会発表](計3件)

鈴木美津子、「異国への旅 ロマン主義時代の小説を中心に」片平会50周年記念大会、名古屋工業大学、2014年8月2日、招待講演

鈴木美津子、「ヘイスティングズ裁判とロマン主義時代の女性作家」、日本英文学会第86回大会、北海道大学、2014年5月24日、招待発表

鈴木美津子、「マライア・エッジワースの『縁故』に見られる国家観」、シンポジウム「都会、田舎、子供」、東北ロマン主義時代文学・文化研究会第2回大会、東北大学、2013年7月20日

[図書](計3件)

鈴木美津子、「『ラドロウの奥様』と歴史小説の伝統」、『エリザベス・ギャスケル中・短編小説研究』、大阪教育図書、2015年11月刊行予定、231-244、査読有

鈴木美津子、「パトリック・ブロンテの『キラニーの乙女』と国民小説の伝統」、『ブロンテと19世紀イギリス』、大阪教育図書、2015年10月刊行予定、査読無

鈴木美津子、「異郷への旅 オーエンソンとスコットのインド表象」、『英語英米文学研究』、金星堂、2015年3月、222-239、査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 美津子 (SUZUKI, Mitsuko)
東北大学・大学院国際文化研究科・名誉教授
研究者番号：60073318